

プルースト的時間に反して

村山紀明

「時間」に関して、プルーストは「甦りともいふべき」時間論*を提起した。この円環的時間とは異なる時間論を、吉田健一のそれを例にとってかいまみたい。かれはどのように時間をとらえていたのか。

簡潔明瞭につきのように言っている。

「[...] 時間は実在してこれがなくなるときに我々も消える」¹⁾

哲学史のうえで、時間は存在しないという論があるが、まず吉田は時間の存在を認めている。

時間と存在とは同一のものなのである。「もし、生命が変化にあることを知っているならば、その変化とともにあってさうしてゐるのを受けてゐることは地道に呼ぶ他ない態度を我々に取らせる。」²⁾

変化がないということは時間がないということでもある。であるから、「生命が変化にある」ということはとりもなおさず存在自体が時間であるということにもなる。

また、つぎのようにも言う。

「もし時間がなければすべての動きも止まり、それが結局は死滅を意味するといふ自明のことはそれが自明であるから見逃してはならないのである。」³⁾

他の箇所では物質を構成する原子運動も時間があるからこそ、時間という概念をとりいれなければ存在しない運動が存在し、それゆえ物体が存在するということであり、時間がないとしたならば、物体もなにもないということになるであろうといっている。時間があるからこそ世界が存在するのだ。さらに、つぎのようにも言っている。

「一つだけ確かなことは時間がたつものであっても、それが意識の上でもなければ時間時間は我々から遠のくことでこれを大きな不幸と見做すべきであるのは我々も時間だからである。」⁴⁾

徹底した人間主義の時間といえようか。清水徹に言わせれば「時間とともに生きる姿勢、時間のなかに住まう態度である。」⁵⁾

「吉田健一の場合、ベルクソンの内的時間」と外的時間の峻別などどこにもない。まったく日常的などにもあるはずの時間を、現在時のしめやかな持続として促えるのだ。」⁶⁾

こういう時間概念はたとえばマルセル・プルーストの時間とは必ずしも相入れないところが大きい。

「プルースト、或いはプルーストの小説の主人公にとっては状況のきっかけになったものがマドレエヌの味、或は金属性のもが金属性のもを打つ音といふやうな具体的に五官に訴へて来るものだった。又それが私小説を書く上での仮設だったので少しも構はない。そのきっかけがあつて忘れてゐた自分が経験したこととともにそのその自分が甦り、これが状況の再現とも再生とも呼べるべきものになって主人公はその状況にゐる。併しプルースト

は過去と現在の区別を固執して現在の前にあったことは過去と見做してゐるから同じ五官の反応が過去と現在に共通であることで過去でも現在でもない時間が得られるという風に考えている。そしてその区別だけ余計であるがかうして忘却の後にそのうちから再現した状況がまだ進行中の状況では意識の働きが決定してゐなくて不確かであるのに対してさうした条件の下での夾雑物が全くないその状況であるとするは間違つてゐない。そこにはただ一つの時間の経過、持続があるだけである。」⁷⁾

ベルクソンの内的時間の持続というのでもなく、清水の言う現時のしめやかな持続と吉田は時間をとらえるのだ。

また、ブルーストの言う過去の甦り、というのでもなく、自分と一体となっている時間なのであるから＜自分が時間なのであるから＞断絶が接続するというようなこと、過去と現在との二つのものが一つのものになるということは吉田の時間論においてはおこらないであろう。

清水は前述したように「いわば時間とともに生きる姿勢、時間の中に住まう態度である。」としている。ブルーストは、過去と現在とを超越した、過去でも現在でもない超時間というが、あるいは時間を脱けだした瞬間というが、吉田の場合は、時間から脱けだすというのではなく、比喩的に言うならば、時間のうちに存在がはいりこんでいるのである。

吉田はつぎのように言う。

「時間は何の為にあるのでもなくてただあるので時間が含む一切のものも何の為にあるにあるものでもない。我々は […] 凡ては人間の仕事であり、それでどのようなものにもその目的があると考え勝ちであるが目的はこれを達すればすむものであって目的といふもの自体にどういふ価値があるのでもないことを我々は見逃してゐる。」⁸⁾

清水は言う。「彼＜吉田＞は時間および空間という二つのカテゴリーから世界を考える態度に反対する。もし時間がなければまったくの無以外のなにものでもない以上、時間こそは世界の至高の原理、世界そのものだ。」⁹⁾

前述したように、原子運動ひとつとらえても、「時間というものがなければ、まったく無以外のなにものでもない以上、時間こそは世界の至高の原理、世界そのものだ。」という結論が導かれるのであろう。

吉田の時間論が、ベルクソンの純粹持続と相入れないものならば、われわれは、ここでガストン・バシュラルの垂直的時間を想起できないであろうか。

「ちょうど息をするようにして現時に浸ることを、吉田健一は『充実した生き方』と呼ぶのだ」¹⁰⁾と清水は指摘しているが、これこそはバシュラルの言う、垂直的時間であろう。「われわれは、すべての真実な詩の中に、停止した時間、尺度にはしたがわないう時間、つまり、川の水や過ぎゆく風とともに水平的に逃げ去ってしまう普遍一般の時間と区別するため、特に、「垂直的」と呼んでみたい時間の要素を見いだすことができるのである。」¹¹⁾「われわれが現在についてもつ＜観念＞は特異な充実を示しており、また特異な積極的な明証性をもっている。われわれは自己の欠けることのないパーソナリティをもって現在に身を置いている。われわれが生存の感覚をもつのは、ただ現在によって、そして現在においてのみである。現在の感情と生の感情のあいだには絶対的同一性 *identité absolue* がある。」¹²⁾

バシュラルは、『瞬間の直観』で『シロエ』を引用しているが、これな吉田の時間と同

じではないか。

「十分に精密にされた瞬間は、アインシュタインの理論のなかでもひとつの絶対である。瞬間にこの絶対の価値をあたえるためには、時間－空間の一点として時間を総合的狀態で考察すればよい。換言すれば、時間と空間と両方にかかわる綜合化として存在を受けとるべきかだ。」¹³⁾

清水は言っている。

「現在時のたえざる持続が始めも終わりもなく流れるという時間論は、じつは時間性の消去としての永遠と紙一重の差しかなく、この紙一重の差異に、はたして悲劇性はどこまで拒否しうるかという、すぐれて現代的な課題がひそんでいる。」¹⁴⁾と。

瞬間としての現在時のたえざる持続と時間性の消去としての永遠と紙一重の差しかないというアクチュアルな問題へと、清水は吉田の時間論にかんして指摘している。

「雲に限ったことでなくて我々は寧ろ時間を求めてものを見るものであり、その中にもものを見るのであって時間を意識することが出来ないときに我々は何かが不足しているのを感じる。」¹⁵⁾

時間はすなわち意識ということであり、これは汎時間主義とも称せられるであろう。

さらに、時間と空間を対立したものともまったく考えていない、これを時計の針と考えあわせて吉田は説明している。

「我々はただ時空を越えてといふやうな言ひ方に迷はされてみただけのことである。併し時計の針の回轉が時間であってその時計がその形をして占めてゐるのが空間であるといふ種類の見方はその対象が、手にとって見ることが出来る物質であるだけにその先まで考へを進めるのに遍してゐる。もし少しでもそれでも進めるならば時計の針で時間が推移するものでないことは余りにも明かであり、その少し先まだ考えるならばその時計そのものを時間とともに推移するものであることも解って空間は時間のうちに消える。」¹⁶⁾

吉田はさらにつぎのように言っている。

「厳密に言へば時間の意識といふのは重語であるとも考へられる。それは時間があって意識が生じるので時間とこれを時間といふものと何らかの形で認めることが意識する行為の前提をなしてゐるからであって時間を無視して意識が残存するものならば、それは我々が眠って夢を見てゐる時の状態でも解る通りに支離滅裂になることを免れない。」¹⁷⁾

この引用も前に指摘した時間＝意識ということを行ったものであろう。

それでは時間＝意識とはどういうことを意味しているのであろうか。それをわれわれは、吉田の『瓦礫の中』から『旅の時間』に至る小説の言説中に見いだすことができる。

たとえばつぎのような1節：

「朝日が鎧戸の羽板の隙間とガラス窓とレースを通して差し込むのは部屋の中を明るくするといふ程のことはなくて寧ろ微光を放つ霧のやうなものが窓の辺りに漂ひ、それでものが見えるのであるよりも光が眼に映る感じしかない。」¹⁸⁾

吉田は「厳密に言へば時間の意識といふのは重語であるとも考へられる。」¹⁹⁾とし、「それは時間があって意識が生じるので時間とこれを時間といふものと何かの形で認めることが意識する行為の前提をなしてゐるからであって時間を無視して意識が残存するものならばそれは我々が眠って夢を見てゐる時の状態でも解る通りに支離滅裂になることを免れない。」²⁰⁾としている。結局「その際に意識に上るのが時間だけではないといふのもそのま

ま形では富ってゐない。それは意識の究極の対象になるものが時間であるのみならず一切のものが時間とともにあって存在し、そのどれもがそれなりに時間を表わすものと見られるときに時間以外のものといふものが何を指すことにもならなくなるからで時間の観念があってその時間のうちにあるものがその輪廓を明確にしてそれ故に時間を意識することが世界の認識でもある。」²¹⁾

時間＝意識とは、世界の認識に通じているのである。吉田の諸作品にはすべて時間のかげがおちている。

「言葉を探すといふのはどういうことなのか。この時に我々は時間の経過を知ってそのうちから言葉が生れてくるのを見るので言葉も時間から生じてそれにその言葉の形を與えるものなのである。」²²⁾

世界の認識は言葉により、その言葉は時間から生じているのである。

時間＝意識という時間論を、別の観点から、かれは説明している。それは変化という観点からである。

「或るものがそのものであることがその為には持続して変化する。」²³⁾

これは変化と静止という問題にもつながっていくだろう。

「併し静寂は我々を恐れさせるものではない。この男が逃げ去ったのは音が聞えなくなったのでなくて一切の変化が止ったと思ったからなので我々にはあり得ないことを考えて怯える必要はないが、変化というものがなくなる事態がもし起ったならばその瞬間は我々も恐怖を覚えるのに違ひない。」²⁴⁾

吉田によれば時間がない世界は考えることができないから、当然変化のない世界とは無の世界であり、ものがものたりうるには変化が必須なのである。

そのような時間論から吉田の人生哲学が生じてくる。「もし生命が変化にあることを知っているならば、その変化とともにあってさうしてゐるのを受けてゐることは地道にと呼ぶ他ない態度を我々に取らせる。」²⁵⁾

変化とともにしか存在できないわれわれ人間。その変化は時間とともに生じているのだ。

吉田にとって「我々が一切のものを掴むには先づそこに時間を置いて見る他ない。」²⁶⁾のである。かれは繰り返し書いている。

「今日ないもの、或はないやうに考へられてゐるものの一つに時間がある。それが餘りにたよりないものであると一般に考へられてゐる為に本當にもし時間といふものがなければどうなるかといふことは殆ど注意を惹かない。」²⁷⁾

つねに時間を意識する吉田の人生観はつぎのようにまとめることができよう。

「我々は生れて刻々と、或は同じことながら月日を重ねて時間がたつてやがては死ぬ。」²⁸⁾

そこにはひとかけらの悲愴感もない。われわれは「時間はどこでもいや應なしにたつて行く。」²⁹⁾世界に存在しているのだから。

注

* Marcel Proust, *À la recherche du temps perdu*, I à IV, «Bibliothèque de la Pléiade», Gallimard, 2019.

1) 吉田健一『時間』60頁 「吉田健一著作集」第26巻 集英社 昭和55年

2) 吉田健一『変化』125頁

3) 吉田健一『時間』62頁

4) 吉田健一『時間』70頁

ブルースト的時間に反して

- 5) 清水徹『時間、この至高なるもの』125頁 水声社 2003年
- 6) 清水徹 同書 同頁
- 7) 吉田健一 前掲書 171頁
- 8) 清水徹 前掲書 125頁
- 9) 清水徹 同書 126頁
- 10) 清水徹 同書 130頁
- 11) ガストン・バシュラール『瞬間の直観』掛下栄一郎訳 126頁 紀伊國屋書店 1997年
Cf. *L'intuition de l'instant*, Le livre de poche, Paris, 1994, Éditions Gonthier, 1932.
- 12) バシュラール 同書 25頁
- 13) 及川馥『原初からの問い』111頁 法政大学出版局 2006年
- 14) 清水徹 前掲書 139頁
- 15) 吉田健一『時間』123頁
- 16) 吉田健一 同書 135頁
- 17) 吉田健一 同書 136頁
- 18) 吉田健一『本当のような話』213頁
- 19) 吉田健一『時間』137頁
- 20) 吉田健一 同書 136頁
- 21) 吉田健一 同書 137頁
- 22) 吉田健一 同書 138頁
- 23) 吉田健一『変化』55頁
- 24) 吉田健一 同書 109頁
- 25) 吉田健一 同書 105頁
- 26) 吉田健一『時間』102頁
- 27) 吉田健一『時をたたせる為に』213頁
- 28) 吉田健一 同書 214頁
- 29) 吉田健一 同書 215頁